

屋久島いきもの調査隊通信

瀬切の森からの手紙



時には昔の話を (3) 2011年	02
調査員からのクーコール (6) 冨久尾歩さん	04
調査メシ (6) 雨の日は下界でクレープを	06
やくざる七つ道具 (6) 真空シーラー	08
解き明かす! 屋久島の生き物の暮らし (6)	10
ヤクザルなよんこま (6)	13
屋久島の森の住人たち (6) ヤクシマヤダケ	14
ぶらり屋久島 (4) 西部林道	16
犬山より	18

Research Group since 1989



2011年

1989年から始まったヤクザル調査隊。これまでさまざまなことがありました。過去のある年を取り上げて、その年の調査を振り返ります。

コロナ前、調査員は前期 25 人程度、後期 28 人程度でしたが、場合によっては、20 人以上の参加申し込みをお断りしないといけなほど、たくさん申し込みが来るがありました。さらに言えば、頭数がそろっていればいいわけではなく、サルを追いかける統括者は、前期 5 人、後期 7 人と決まっており、2 年目、3 年目の調査員からは、食料や装備を管理する事務局を選ばなければなりません。毎年、複雑なパズルを解くようになんとか人を集めていたのですが、それにもっとも苦労したのが、2011 年でした。この年の調査の 5 か月前、東日本大震災がありました。おそらくはその影響で、申し込みがとてま少なかったのです。申し込んでくれた人を全員採用し、それでも前期と後期のバランスがうまく取れなかったため、さまざまな裏技を使いました。3 班を分割して、左岸の定点と、SS 群のカウントを前期に、右岸の定点調査を後期に行うことにしました。後期には、ほかの大多数が 3、4、5 班の調査を行う中、ひとりだけぼつんと、調査地で最も標高の高い 1b 定点をやらなければなりません。「近くに誰もいないから、迷ったら誰も助けに来てくれない」と、強く緊張して 1b 定点に向かった調査員が、緊張のあまり 1f という別の定点に向かってしまい、川を渡る寸前にまちがいに気づいて引き返したこともあったそうで



前期集合予定日には、鹿児島港を条件付きで出港したフェリー屋久島 2 が、宮之浦港の波が高く接岸できず、屋久島を目の前にして引き返す、という珍事も発生しました。写真は、迎えに行った調査員が、宮之浦港から撮影した、戻っていくフェリー屋久島 2。この波じゃあ、接岸は無理ですね。この船に乗っていた人たちは、往復 8 時間、ひたすら揺れに耐えて過ごしました。急遽鹿児島で宿が必要になり、後期参加の鹿児島大学の調査員のお父さんが所有しているという、未入居のマンションに泊めてもらえることになり、電気ガス水道が通じてないので、近所のコンビニにぞろぞろ歯を磨き用を足しに行ったそうです…



この年、もう一つ大変だったことは、調査地の林道が、途中から不通になっていたことです。前期の入山予定日に工事をして直してくれることになっていたのですが、工事の開始を待っていると、入山が遅れてしまいます。そこで、入山日早朝に、屈強な男女 10 名が、テン場設営に必要な、テントやらブルーシートやらロープやらを担いで、不通地点から 3km と少し、1 時間弱を歩いて上がり、テン場を設営することにしたのでした。

す。5 班の班長は後期調査第 6 日目に下山したため、この班は最後の 2 日間、統括者がいませんでした。人手が足りないために、テン場すぐ近くの 2d 定点の調査員が、前日に行った瀬切右岸の 2ab の定点に送りに行き、そのあいだ食事当番が 2d の定点調査を行ったこともありましたが、調査員が一人風邪でダウンして、食事当番が植物調査を行い、しかもそれが、定点調査終了時刻の 4 時になっても終わらなかったこともありましたが、

コロナ以降は、一度に集まる調査員を大幅に減らして、班に関係なく、順番に西から東、もしくは東から西に定点を 3 日間順繰りにやっています。考えてみれば、2011 年の超変則的な班編成は、その練習だったのかもしれない。

調査そのものにも、とても苦労しました。前期の間に、OM 群のカウントが終了せず、後期に、ただでさえ調査員不足の中、大谷洋介さん(2004-2014)と大田幸弘さん(2010、2011)が、前期の調査域である OM 群の行動圏内で、ふたりだけの独立系調査をする羽目に陥りました。ふたりは毎日、大川林道本線と 12 支線をひたすら歩き、OM 群を探しました。成果のない日が延々と続き、もうあきらめかけた最終日、大田さんがフルカウントに成功しました。彼は、この年初めて導入されたビデオカメラを持ち、群れが道を渡る場面を、完全に撮影したのです。これまで、フルカウントするには、群れの全体が道を渡る場面を、最初から最後まで観察すること、それも、性年齢の識別に熟達した調査員が観察することが必要でした。ビデオカメラによるフルカウントの成功は、そのような僥倖に頼らなくても、カウントの機会があることを示しました。それ以来、統括者、特にサルの研究者ではない人は、必ずビデオカメラを手に調査に向かいます。とは言え、ビデオによるカウントに成功したことは、実はあれ以来、一度もありません。大田さんは、よほどの幸運の持ち主だったようです。

(半谷吾郎 1993-2022 参加)

コロナ前は、調査地の東側の 14 定点を 1 班と 2 班、西側の 16 定点を 3 班、4 班、5 班に分け、それぞれ前期と後期に、最大 7 日間調査を行っていました。定点+統括者+食事当番(2-4 人)、それにシカ調査と植物調査が若干名で、合計 25-30 人前後となります。



クークールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。各界で活躍する調査隊 OBOG に、クークールを鳴いてもらいました。

富久尾歩「私の足跡」1993-1995 参加

ヤクザル調査には岐阜大学のサークル(生物研究会)の先輩から誘われて、フィールド調査や屋久島にも興味があったので参加しました。それなりに年を取った一調査隊員がその後、どんな人生を歩んでいったかをご紹介します。

大学を卒業後は、研究所 A → 青年海外協力隊 → 研究所 B → 研究所 C → 開発コンサル D → 開発コンサル E と職を転々としておりました。一応、全ての職に共通していたのは「農業」「海外」。自分の中ではこのキーワードに拘って職探しをしていました。農業は「食」に直結しますので、生きていくのに不可欠な要素です。このままコンサルを続けていくか、また別の道を模索するか先の事は分かりませんが、今後も農業に関連したことをしていきたいと思っています。

高校生の頃から海外の農業に興味があり、先進国ではなく開発途上国に行きたいと思っていました。大学卒業後すぐに協力隊に参加したかったのですが、勇気が無く保留に。大学院に進み、最初の就職先研究所 A で社会人を経験して、ちょっとその気になり憧れの協力隊へ！南米ボリビアで

福島で始めた登山



村落開発普及員として稲作(陸稲)の普及に関わりました。ボリビアで過ごした2年間は私の宝物です。

研究所では主にリモートセンシングや GIS を用いた農地解析を行っていました。調査は楽しかったのですが論文書くのがしんどかったです。開発コンサルでは ODA の案件に携わり、年間半分近く途上国にいる生活を送っていました。途上国の生活は場所によっては仕事も生活も大変です。衛生面、安全面で不安な国も多いため、危機管理能力は身に付いたように思います。

調査地での体験としては、中国では強烈な下痢で激やせ。エチオピアではダニに噛まれて痒くて眠れず。ウズベキスタンでは農家さんにウォッカを飲まされ、何度もつぶされる。ボリビアでは標高 4000m のポトシというウユニ塩湖と銀山が有名などころでしたが、高山病で体調はボロボロ。インドでは酒が禁止されている州だったので、隠れて酒を買い、部屋の中で飲むという経験をしました(どんな手を使っても酒は飲みたい!)

海外で農業に携わる仕事がしたい!との思いから開発コンサルに入りましたが、この3年ほどは福島の飯舘村長泥という帰還困難区域で仕事をしています。会社の事情で国内の案件も取るようになり、一歯車としては会社から「行け」と言われれば行くしかない。最初はそんな感じでしたが、どんな仕事も続けていけば楽しみも見出せます。復興支援に関わるという点でも大変やりがいを感じています。長泥では作物や花卉を栽培して、安全性を確認するという栽培試験を行っています。長泥は今年の連休明けくらいには解除される予定ですので、営農再開を心待ちにしています。

どんな状況でも楽しめる要素を見つけるというのは、大学時代に参加したヤクザル調査を通じて身についた事だと思っています。自分の中で2番目に強烈な思い出として残っているのがヤクザル調査です。今後もヤクザル調査隊を陰ながら応援しています!



長泥で栽培しているトルコギキョウ

調査メシ



食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘を、レシピとともに語ります。



鎌田朋弥 2019-2022 参加

雨の日は下界でクレープを

「月のうち 35 日は雨」なんて小説に書かれるほど、雨の多い屋久島です。ヤクザル調査でも、幾度予定を狂わされたことでしょう…。そんな雨に縁のある、そして意外にも歴史のある、「クレープ」について紹介します。

2004 年後期、停電や断水を引き起こすほどの台風にあい、避難場所だった一湊の測候所跡で、景気付けの小麦粉パーティーが開催されたそう。これがヤクザル調査隊でのクレープパーティーのはじまりとなるのでした。2 回目は 2015 年後期、この時も台風の通過待ち、かつ食当隊長の一人が足止めになって来島できず。忙しさに追われるもう一人の食当隊長糸野真穂さん(2014-2016)が、当日誕生日であったこともあり、彼女を労うクレープパーティーが開かれたそうです。3 回目は 2019 年前期、天候が安定せず下界からの日帰り調査が続き、登る人も、待てをする人もお疲れ気味の中、台風通過待ちのクレープパーティーが開催。この年も食当隊長の一人であった手塚詩織さん(2018-2020)が誕生日で、作る様子がばればれのサプライズクレープケーキでお祝いしたのでした。先陣をきり計画してくれた三浦たいらさん(2018-2021)は、2004 年のパーティーでクレープを

焼いていた小林朋子さん(2004)の教え子だそう。いくつもの歳月を経て、いろいろな点と点を繋げるような、そんな料理でもあるようです。

4 回目は 2022 年、台風によりテン場生活がほぼできなかったファイナリストたちによるもの。材料は、なんとか使い切りたい小麦粉、台風の間、A コープに入荷がないために貴重な卵、水でもいいけど贅沢するなら牛乳。それらを混ぜた生地をフライパンやホットプレートで焼いていきます。おたまだけでは薄く広げるのは難しく、割り箸で自作した「生地を広げる棒(トンボというらしい)」が採用されていました。焼き上がった生地にお好みの具材(みかんやバナナ、ハムやアボカドのおかずクレープも!)、生クリームをのせ、くるめば完成です。この年は生クリームの泡立てに苦戦し、失敗したとろとろのクリームをどう消費しようかという別イベントも発生していました。

2019 年、2022 年と、2 回もクレープパーティーを体験した私です。雨でテン場生活ができないのは悲しいことで、なんで屋久島で手作りクレープとタピオカ(2019 年はタピオカもあったのです)食ってんだ…?と思わなくもなかったですが、下界の特別イベントを、このように隊員や雨と共に楽しみ、思い出せることは、それもまた一興だなあと、そう思うのです。次はいつ開催されるでしょうか。ぜひ、雨の日は下界でクレープを!



左：2019 年、クレープケーキでお祝いされる手塚さん
上：2022 年撮影。2022 年自作のトンボで作る様子。
右奥では固まらない生クリームを延々泡立てています。

調査参加者は、保険の手続きのために生年月日を申込の際に知らせてもらうことになっており、事務局は誕生日を把握済み。あの手この手で誕生日をお祝いします。最初の年はサプライズですが、何年も参加した経験者だと、祝う方も祝われる方も、ビミョーな感じですが…

やくざる七道具

山の中に泊ってサルを調査するのに、 yakuzaru 調査隊は様々な道具を駆使します。30年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

真空シーラー

本通信の第4号に掲載された「調査メシ(4) 鯖節の味噌汁」で紹介されている通り、調査隊特製の味噌汁に入れる鯖節は、真空パックに保存します。その真空パックを作る道具が、真空シーラーです。調査隊での導入は2015年のことです。それ以前は、キャンプ生活中、鯖節にすぐ黴が生える、という悩みがありました。鯖節がきれいな状態でいられるのはだいたい入山後2、3日までです。それ以降は、初参加の人は、赤や緑や白の黴で覆われた、カラフルな鯖節を見てたじろぎますが、経験者に「だいじょうぶだいじょうぶ、そもそも鯖節って黴付けして作るものだからさ」などと言われ、そういうものかと思って黴を削ります。中には「だいじょうぶだいじょうぶ、煮込んだらわかんないよ」と言って、黴を取らずにそのまま味噌汁に入れていた人もいたような気もしますが…都合が悪いことは記憶の奥底に封印してしまったせいか、詳しく思い出すことができません。

真空シーラーは、専用のパックと一緒に使います。ジッパーで封をした後、空気抜き穴に真空シーラーを当て、ボタンを押して「ウィーン」という音がすると、モーターの力で空気が抜けていきます。1分くらいかけて空気を抜くと、鯖節の真空パックの出来上がりです。真空シーラーを導入することで、鯖節に黴が生えることはほとんどなくなりました。ただ、Aコープなどで売っている鯖節は骨を抜いていないので、そのまま空気を抜くと、実から飛び出ている骨で、袋に穴が開いてしまいます。なので、

最初に骨を抜いておく必要があります。鯖節工場では、お土産用の真空パック入りの鯖節を作るのに、パートの人たちがピンセットで骨を抜いているとのこと。yakuzaru 調査隊員も、雇ってもらえるかもしれませんが。

「調査メシ(4) 鯖節の味噌汁」で紹介した通り、コロナ以降、鯖節味噌汁はインスタント味噌汁に置き換わってしまい、yakuzaru 調査隊手製の、鯖節真空パックを作ることはなくなりました。ですが、真空シーラーは以前にも増して使われています。コロナ以降、調査員が入れ代わり立ち代わり参加するようになったため、頻りに誰かが送迎のために下界に降り、好和荘で夕食のおかずを料理し、それをテン場に持って上がることになりました。たいてい、料理は前日の夜に作り、早朝に入山して持って上がったものを、夕方に食べることとなります。傷むのを防ぐため、料理は冷ましてから真空パックにします。それを一晩冷凍もしくは冷蔵したのち、クーラーボックスに入れて調査地に運びます。調査中は、水場などの涼しい場所に置いておき、夕食時に、湯煎で温めてからいただきます。この調査隊手製「レトルト」食品は、本物のレトルトが続いて単調になった食生活を、とつても充実したものにしてくれます。

この真空シーラー、腸内細菌の調査でも、糞試料を嫌気状態に保ったまま実験室に持ち帰るのに使用しますが、試料保存用と食品保存用、二つ買ったのか、一つだけなのか、どちらを先に買ったのか、試料保存用の真空シーラーが実験室のどこにあるのか、都合が悪いことは記憶の奥底に封印してしまったせいか、詳しく思い出すことができません。

(半谷吾郎 1993-2022 参加)



真空シーラー。Amazonで3000円くらいで買えます。



真空パックにした調査隊手製「レトルト」食品。この日は夏野菜の揚げたしと卵焼き。

腸内微生物研究では、ほかに糞を混ぜるためにブレンダーとか、滅菌用に、オートクレーブ代わりに圧力鍋とかも買って使いました。本文にはあんなこと書いていますが、ちゃんと研究者および生活者としての良心は持ち合わせていますので、どうぞご安心を。

解き明かす! 屋久島の生き物の暮らし 6

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

サルを騙して群れどうしの関係を探る

栗原洋介 2009-2017 参加

Kurihara, Y., & Muto, H. (2021). Behavioral responses of Japanese macaques to playback-simulated intergroup encounters. *Behavioural Processes*, 182, 104279.

動物の群れは食物や繁殖相手をめぐって他群と争います。得られる利益は魅力的ですが、ケンカに時間やエネルギーを使ったりケガをしたり……最悪の場合死亡するなどのコストもあります。そのため、動物は自群が不利だったり得られるものが小さかったりすると、戦わずに争いを避けることがあります。テナガザルのラウドコールのように遠くまで届く音声やキツネザルでみられる匂いづけ行動などは、群れどうし相まみえることなく、争いを回避する手段として有名です。一方で、長距離音声や匂いづけ行動のような「飛び道具」を持たない種が、他群の接近に対してどのように反応するのかはよくわかっていませんでした。

ニホンザルは「飛び道具」を持ちませんが、屋久島海岸域にすむサルは日常的に他群と遭遇します（他群との遭遇を「群間エンカウンター」と呼びます）。つまり、「飛び道具」を持たない種が他群の接近に対してどのように反応するのかをしらべるのに、理想的な研究対象でした。

そこで、私は野外で音声プレイバック実験を行い、再現された群間エン

カウンターに対するニホンザルの反応を調べました。音声プレイバック実験とは、あらかじめ録音した動物の音声をスピーカーで流し、それに対する動物の反応を記録する手法です。いつ起きるか予測できない群間エンカウンター中の行動をシステムティックに記録するのは非常に難しいですが、音声プレイバック実験でその困難を克服できます。

サルは他群の音声を聞くと、採食行動を中断し、急いで木を下りてくるという反応を示しました。また、サルは静かになり（発声が減り）、周囲を見回す行動が増えました。とくに、小さい群れは大きい群れよりも強く反応しました。これらの反応は、他群への警戒度を高め、その後起こりうる群間攻撃交渉で戦うか逃げるか、迅速に判断するのに役立つと考えられます。

本研究の結果は、長距離音声や匂いづけ行動のような「飛び道具」を持たないニホンザルのような種も、接近中の他群の情報を手がかりとして群間攻撃交渉に備えることを示唆しています。また、屋久島海岸域にすむニホンザルにおいては、相手の音声が聞こえるという群間エンカウンター初期段階でも、群れサイズが行動に影響を及ぼすことを示しています。これまで私が取り組んできた、群間攻撃交渉で優位な大きい群れが繁殖に有利になるメカニズムの解明に一步近づく結果ではないかと考えています。

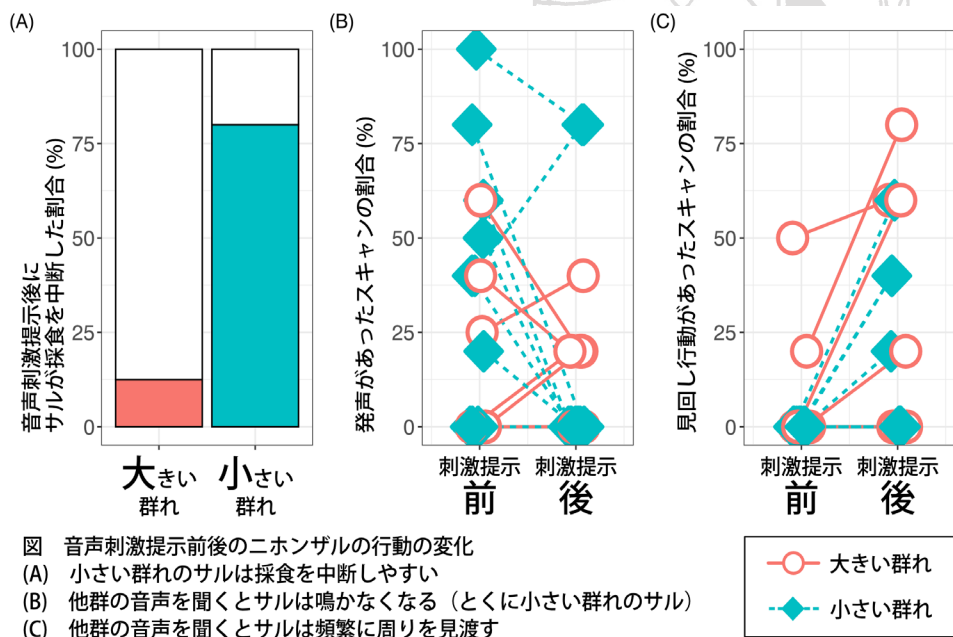
野外での行動実験、サル音声の録音・編集、一步進んだデータ分析など、初めて挑戦することづくしで想定以上に苦労しました。野外でノイズの少ない音声を録るのはなかなか難しく、レインウェアが擦れる音、落ち葉を踏んだぱりぱり音、走り去るバイクの爆音と戦いながら、文字通り息を殺して音声素材を集めました。野外調査はすべて1人で行ったため、サルを追跡しながら実験に適した状況になるまで待ち、40-50 m離れた場所まで小走りでスピーカーを置きに行き、音声が流れるまでに状況が変わってしまったら（サルが移動するなど）慌ててスピーカーを回収に行き、またよきところでスピーカーを設置して……の繰り返しでした。さらに風の強い冬や



西部林道のニホンザル。

屋久島海岸部では、小さい群れに子供が生まれず、最終的に消滅してしまう、ということが何例も観察されています。おそらくは、小さい群れが群れ間での食物や土地をめぐる競争で不利になっているためだろうと思われませんが、そのメカニズムは不明のままです。

セミのうるさい夏には調査を実施できず、2015年秋から2017年初夏までこつこつデータを集めました。しかし他群の音声に反応してサルが木から「ぼとぼと落ちてくる」様子はかなりのインパクトで、最後まで実験を続ける動機になりました。Stan というプログラミング言語を使ったデータ分析では、Muto さんが救いの手を差し伸べてくれました。心理学者の Muto さんは野生動物の観察研究にゆかりはなく、Twitter の DM でいきなり持ちかけた相談に快く乗ってくれた聖人で、いつか直接お礼を言わねばとおもっています（まだ会ったことがない）。いま振り返ると、気長な性格とよきヒトの助けのどちらが欠けても論文化にはたどりつけなかっただろうなあとしみじみおもいます。



ヤクザルなよんま



屋久島の森の住人たち 6

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象である二ホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

ヤクシマヤダケ
(*Pseudosasa owatarii*)

イネ科ヤダケ属。屋久島固有種。
同属のヤダケに比べ小型で、葉は幅が細い。ヤクザサとも呼ばれる。



屋久島は標高が高く、山頂の宮之浦岳は標高 1,936m です。島のほとんどは森林で構成されていますが、標高 1,700m あたりを境に風雪や水分条件の悪化による山頂効果で樹木が生育しづらくなり、代わりにヤダケ属の一種であるヤクシマヤダケというササが優占するような環境になります。本田調べによると、島の西側の永田歩道ではヤクシマヤダケは鹿之沢小屋（標高 1,550m）くらいから林床に生え始めます。屋久島の山頂へ赴くと、一面ササ原が広がっている中に大きな花崗岩の岩が露出している永田岳や宮之浦岳を一望でき、ヤクシマヤダケが屋久島の山頂部の景観を構成する非常に重要な植物であることがすぐに分かると思います。ヤクシマヤダケは試算によると一ヘクタールに平均 800 万本くらいの高密度で生えているので、春先のポカポカした日にふかふかのササの上に寝転んで日向ぼっこすると結構気持ちよく寝ることができます。ちなみに、昼寝や藪漕ぎでヤクシマヤダケと戯れる機会はかなりありましたが、本州のササ原にいるようなダニの被害にあったことはありません。

さて、ヤクシマヤダケは山頂部のササ原を利用するサルとシカの重要な食物なので、わたしはその生態調査をおこなっておりました。葉やタケノコの季節変化を調べてみると面白い結果が出てきました。ヤクシマヤダケの新葉やタケノコは続々と出続けて、4-11 月の半年以上存在することが

分かりました。文献を見つけることができたササの一種であるミヤコザサやスズタケと比べてみると、年を通して倍以上の期間、新葉やタケノコが存在していることになり、ササの中でも非常に変わった生態であるかもしれません。また、栄養分析もおこないました。サルが一心不乱に食べている新葉の髓とタケノコは、森林内の広葉樹の成熟葉に比べ、タンパク質の量も豊富で、かつ、消化しやすいタンパク質で構成されていることがわかっています。植食者であるサルやシカにとって、ヤクシマヤダケはたくさん入手できる上に、よい食べ物であることが分かってきました。これらの結果は今後論文にして発表するつもりです。

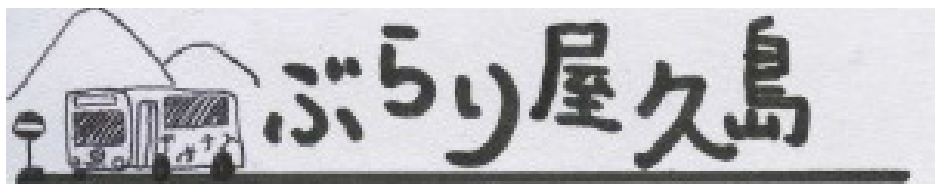
地下茎でつながっているタケ類は、同一個体が地下茎からタケノコを生やして成長し続け、ある時一斉に花を咲かせて、その後枯れるという、一斉開花枯死という現象が起きます。半谷さんがオンラインの園芸店で購入したヤクシマヤダケは、2021 年の 6 月に花を咲かせました。私も 2015 年に、登山道上で開花が終わった花穂を一本だけ見つけたことがあります。記録によると前回の一斉開花は 1966 - 68 年らしいです。私が修士の時に足しげく通っていた 8 年前にも、そろそろ開花が起きてもよいのでは、という話がありましたが、2023 年 1 月現在、ヤクシマヤダケの一斉開花が起きているという話は、まだ聞いておりません。おそらく人生の中で一度くらいしか見ることでできないダイナミックな現象であるはずなので、是非ともこの目で開花の瞬間を見てみたいですね！ヤクシマヤダケに興味を持った方は、屋久島の山頂部に赴くか、是非園芸用に販売されているヤクシマヤダケの購入をご検討ください！

(本田剛章 2013-2022 参加)



左：研究室のベランダで育てていた鉢植のヤクシマヤダケが開花！！
上：高密度のヤクシマヤダケの上に寝転がる肥後君 (2012-2015)

ヤクシマヤダケの草原には、アセビやスギも多少生えていますが、サルやシカの食物ということで言えば、ほぼ、ヤクシマヤダケ 1 種だけの環境です。ここに住む二ホンザルには、きっとなにか面白い謎があるはず。本田さんの研究が発表される日が、待ち遠しいです (切実に)



屋久島には、ヤクザル調査隊になじみの場所がたくさんあります。観光客とも、島民の方ともちょっと違う、調査隊目線で偏った屋久島のいろいろな場所のご案内です。



西部林道

西部林道、文字どおり屋久島の西側、永田集落と栗生集落を結ぶ海岸沿いの道路です。世界自然遺産エリアを通過する道であり、ここに行けばほぼ確実にヤクシマザルやヤクシカを見られるとあって、観光客もドライブに訪れる道路です。そして、ヤクザル調査隊の隊員にとっては、入山日前日に行われる実習（ヤクシマザルの観察の練習）をする場所です。

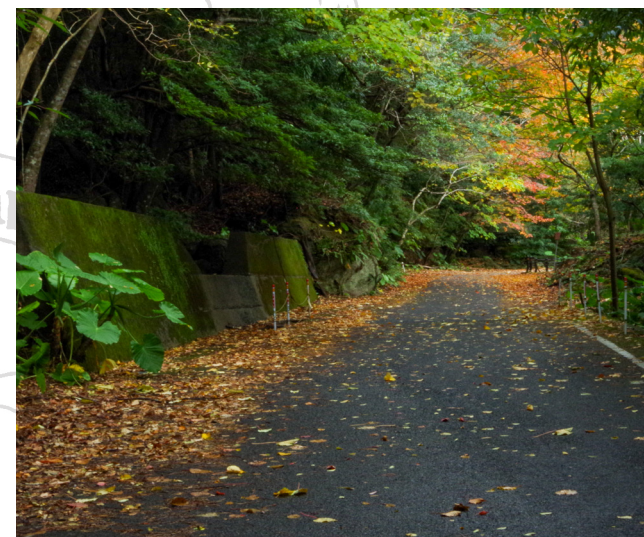
ヤクザル調査隊では、森の中でヤクシマザルを見たときに性別と年齢クラスを自分で判断できるよう、例年、京都、犬山、東京で事前実習が開催されています。そして、屋久島に入った後、西部林道にて“野生の”サルを観察し、改めてそれらの判別を身につけます。実際、ここで初めてニホンザルの観察を行うという人も多いと思います。私も初参加の年、もちろん初めての観察で、ニホンザルの研究をする大学院生や経験者が、サルたちが道路を渡っていく一瞬の際に「あの個体はワカモノオスで、その後ろは3歳で…」と答える姿を見て、一人で判断できるのか一抹の不安を感じつつも、山の上で本当に自分が調査をするのだと期待に胸を膨らませたものでした。（しかし、実際に山の中に入ると、多くの参加者が担う定点調査員がサルの姿を目にする機会はそう多くはなく、西部林道が屋久島に来て唯一しっかりとヤクシマザルを観察できる場所だったなんてこともあるのですが…。）また、初めて会う人ばかりの中、この実習の合間に、調査員それぞれのなんとなくのキャラクターを掴み、距離を少しずつ縮めて

いく時間となったりもします。

そして、霊長類の研究者にとっても、西部林道は名の知れた場所です。西部林道でのヤクシマザルの研究は1970年代に始まり、現在でも多くの研究が行われています。（もちろんヤクシマザル以外を対象にした研究も活発にされています。）ここに行けばほぼ確実にヤクシマザルに会えるほどの高い生息密度や、餌付けではなく人付けによって観察することができる状況など、西部林道ならではの貴重な環境が広がっていることがその一因と言えると思います。また長期継続調査によって、ここに生息する多くの群れの情報があることも、研究のしやすさになっています。私自身も大学院の1年間、すでに生息域や群れの大きさがわかっている1群を対象に調査を行いました。サルを見つけられない日々が続き、呆然としたこともありました。

さて、ここまで西部林道をヤクシマザルの観察や研究をする場所として紹介してきましたが、個人的には印象深い様々な屋久島の顔を見ることができた場所です。谷沿いに見えた大きなアコウの木から苞がサクラ吹雪のように舞う景色、木々の合間から見える海岸線と沈んで行く夕日、クワズイモやシマオオタニワタリをかき分けてじゃれ合うコドモたち（やっぱりサルも印象的です）…。今は人も住んでいない静かな道のその時限りの空気を感じに、屋久島を訪れたときには必ず立ち寄りたい場所です。

（白石泉 2012-2020 参加）



雨上がりの西部林道

ヤクザル調査隊が島内各地のサルの分布を調べていた1990年代、西部林道でも定点調査を行ったことがありました。定点調査員が「もう、お願いだからサル出ないで～」と悲鳴を上げるほど、たくさんのサルが出たそうです。

犬山より

2022年11月5日に、特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊としてははじめての、ヤクザル調査隊友の会時代から数えると3回目となるサイエンスカフェを、京都の会場とオンラインとのハイブリッドで開催しました。

サイエンスカフェでは、いろいろなところで活躍するヤクザル調査隊OBOGのみなさんに、これまでのご自分の歩みを振り返って話してもらっています。今回の講演のひとりである大久保実香さんは、現在は琵琶湖博物館に勤務し、日本の農山村の研究をしています。生物学を学ぶ学部学生だった彼女にとって、ヤクザル調査隊は、ある意味挫折の体験だったとのこと。好きな生き物にまっしぐらな、まわりのヤクザルメンバーを見て、自分はとてもあはなれない、と思ったのだそうです。学生時代、野生生物の調査に参加するために、日本全国に出かけて、そこで暮らす人々の話を聞くことの面白さに目覚め、ヒトの暮らしを研究する研究者の道を歩み始めた彼女の話聞いて、ヤクザル調査中、人の懐にずっと入りこんで、おもしろいおもしろいと話を聞いていた彼女のことを思い出しました。大久保さんが心から面白いと思えることに出会えたことに、ヤクザル調査隊が少しでも貢献できたことを、うれしく思いました。

屋久島いきもの調査隊通信「瀬切の森からの手紙」第6号

2023年2月1日 発行

発行者：特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊

住所：484-0003 犬山市善師野伏屋7-1

ホームページ：<https://yakushimaikimono.com/>

メールアドレス：yakuzaru.researchgroup@gmail.com

編集：半谷吾郎